HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本聖公会仙台基督教会の教会建築にみる設計手法 ： 建築家元田稔と教会建築
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 33, 29-33
Issue Date	1998-07-17
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46597
Type	article
File Information	33_29-33.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

日本聖公会仙台基督教会の教会建築にみる設計手法

――建築家元田稔と教会建築――

川島洋一

はじめに

本研究[註1]は大正時代から昭和六十二年まで建築活動を展開してきたキリスト教信者で建築家でもあった「故元田稔」について、残された建築作品中五十数棟という多くの教会建築を設計した活動経過に注目し、その設計手法と人物像について考察する事が目的である。

本稿では昭和二十～三十年代に関与した「日本聖公会（以下聖公会略）仙台基督教会」を対象として、教会建築の変遷を明らかにし設計手法の特徴について考察を行った。

1　聖公会仙台基督教会の伝道活動[註2]

【創立と初期伝道】　明治三十六年宣教が開始され翌年講義所を設置して本格的な伝道が始まった。東北では福島、青森に次ぐ第三の伝道地となり管理司祭ジェフリースが派遣された。当時は新旧教派が盛んでミッションスクールがキリスト教勢力となった時期でもあった。

同三十七年には片平町の将校邸内に一棟を改造して「講義所」とし、同三十四年元鍛冶町に土地を購入し「仮会堂」を建設した。

【教会成立と日本基督教団】　明治三十八年完成の初期会堂を経て翌年には「教会成立」となり広域的な伝道が行われ、大正十年には手狭から増築された。この頃元田の父作之進が関東教区初代監督（同十二）となった。昭和に入るとその勢いにより大規模会堂建築へと進み同七年前会堂（RC）を完成した。しかし大平洋戦争に入って宗教活動も制限を受け、宗教団体法（同十六年）によ

り聖公会も教団に所属して単立教会となった。そして昭和二十年七月の仙台空襲により外壁を残して前会堂が焼失した。

［東北教区と戦後の伝道］ 戦後法案廃止により現名称にもどるが前会堂の撤去が出来ず、残った宣教師館・牧師館で礼拝活動が展開された。当時「新しい町づくりでの道路幅拡張に支障」との内容記事[註3]があり、この状況と会堂復興を目指して、同二十九年春から再建計画が始まり十二月に現会堂一部の設計がなされその後完成（Ⅰ期）。この工事に元田稔が関与し会堂全形態の完成（Ⅱ期）を踏まえた設計案が作成された。同三十二年Ⅱ期工事により現会堂が完成し、東北教区の中心として伝道活動が行われ、同三十四年には鉄筋コンクリート造二階建教区事務所棟を完成し、また廃墟問題を解決し（同三十七年）戦後処理を終え、以降伝道は拡大し数回の改修工事を実施している。

2　教会建築の変遷

［講義所］ 将校の馬小屋改修との事で、恐らく木造平家切妻屋根で、小さな馬小屋の出入口をふさぎ、内部に一部屋集会室程度の改修がなされていたと推察する。

［仮会堂］ 記録では「元鍛冶町に礼拝堂敷地として購入し、会館建設仮会堂」で前述同様にその他は不明。恐らく木造平家切妻屋根の簡素な建物と推察する。

［初期会堂（写真1）］ 記録「広大な敷地の中に会堂、牧師館、宣教館が建ち、赤煉瓦化された礼拝堂新築は東北で最大の会堂建築」とあり、外観と内部写真から煉瓦造平家切妻屋根妻側正面庇下に玄関が配置され、会堂内部正面にチャンセル、身廊と袖廊によるバシリカ形式に類似。また正面妻側上部に丸窓（バラ窓）棟木上に十字架が置かれ高い塔はなかった。また木造斜め天井のラテンクロス交差部上部に高窓があった。ただ正面左側の下屋機能は定かではない。設計者等についても不明だが、宣教師指導でロマネスク調赤煉瓦のお洒落な会堂であったと言え、その後大正十年には増築した。

［前会堂（写真2）］ 記録「ビンステット主教の時、鉄筋コンクリートの二階建て会館を建てたが、昭和二十年に戦災で焼失」とあり、廃墟となった写真（新聞記事含

註3）で推定すると、鉄筋コンクリート造の二階建切妻屋根、側面に控え壁を設置。また正面玄関は弧状アーチとなっていた。平面形は長方形で二列対面形式の礼拝室反対側は二階階段席を設置し右側棟に階段があったと推察できる。また左側平家の奥にはアプスとベストリーが左右に広がっていたと推察する。焼失後、臨時的に宣教師館・牧師館を利用して礼拝が行われ、前会堂は昭和三十七年になってすべて解体された。

［現聖堂（図2）］ 設計者として元田稔が関与し、I・II期工事として実施した。I期は鉄筋コンクリート造平家陸屋根の現サイドチャペルと玄関棟を新築した。II期は本屋礼拝室棟を増築し現会堂形態が完成。鉄筋コンクリート造二階建切妻屋根塔屋付で延床面積約一二四坪既存との合計約一五七坪という大規模な教会建築である。外観の独立した塔屋は三角形屋根断面で構成され、特に塔屋デザインが特徴的。内部は二階階段席が配置され単廊式信徒席二列配置で右側面にはサイドチャペルが接している。

3　計画案にみる元田稔の設計手法

［基本姿勢］ 昭和二十九年作成の計画案は、同教会の歴史と同様にこれまで単廊式対面形式の礼拝形態を採用とし、外観正面形は複数案が提案され、完成時の形態を盛り込んでいた。着色透視図や墨入れした図面が保存されていた。実施での平面形（図3）は二回に分けた工事を意識して、大小の礼拝室二室を並列配置する平面計画であった。外観の「塔」付設も重要なテーマであった。

内部は聖公会の伝統を用い、新しい感覚で豊かな空間の演出を試みた姿勢が随所にみられる。

［設計手法］ I期工事では現サイドチャペルのみ建設であり、水平天井でチャンセル奥にベストリーを配置した簡単な建物であった。II期では前述のサイドチャペルに本屋礼拝室棟を増築する形での実施であり、切妻屋根上り梁を見せた高い斜め天井とし、両側間接照明により柔らかい空間を演出している。チャンセル上部壁には、水平庇が設けられていた。広いホールを挟んでの集会室壁面一部に装飾があり、この装飾は階段室としての塔屋

内部に続き、階段上り口のL字型踏面と曲線手摺りに大胆に用いられ、分離派運動でのデザイン感覚と類似している。外観正面は三角形屋根断面と特徴的な塔屋で構成されていて、この形態には二つの計画案があった。A案（図1）は反り屋根の提案であり、伊達藩によって発達した仙台という伝統的風土に適合させて、神社建築に類似する形態であったが、実施では直線屋根の西欧風教会建築デザインのB案（図2）となった。恐らく元田は最初のA案が理想であり、洋風を直接的に導入せず和風を盛り込んでのデザインを意図していたと推察。しかし採用されたB案の正面全容と塔に和風の雰囲気を残した点は、元田の設計感覚の特徴と言える。

4　おわりに（独立塔の演出）

元田稔が関与した昭和二十年代末から同三十年代初期はキリスト教全盛期であり、各教会でも礼拝人数が多く増築新築がみられたが、当教会では焼失した会堂の復興が戦後処理の急務であって、そこにこの工事の根幹があったと考えられる。戦後の物資豊かでない時に鉄筋コンクリート造採用は、当年代での教会建築としては代表的な一棟となり、この構造により元田の「塔」付設が現実となった。同時期の教会計画にも「塔」設置の案[註1]があったが、比較的小規模の木造であり、実施では付設できなかった。従って仙台教会での手法は「塔」実現の第1号となったと言える。

また簡素な装飾が多い中で、階段室に見られる装飾は元田の細やかな感覚を初めて表現した作品と言える。

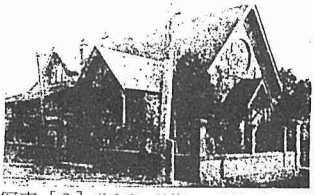
註

（註1）　九三～九七年度日本建築学会大会梗概集及北海道基督教学会基督教学（第三十～三十一号）で発表

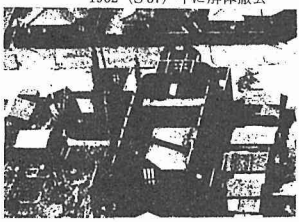
（註2）　日本聖公会百年史等参照

（註3）　河北新報昭和三十年と同三十三年記事

写真［1］初期会堂　煉瓦会堂の外観と礼拝室内部：1905（M 38）年建築

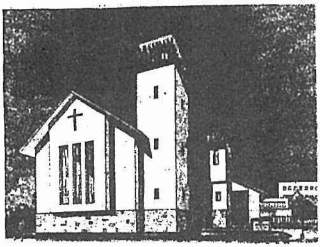


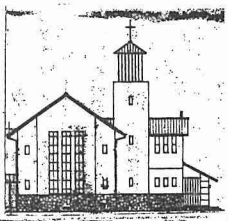
写真［2］前会堂　鉄筋コンクリートの２階建会館：1932（S 7）年建築
昭和 20 年戦災で消失［飛行機からの外壁のみ残る前会堂写真］
1962（S 37）年に解体撤去

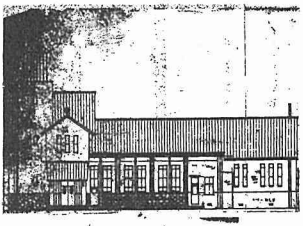


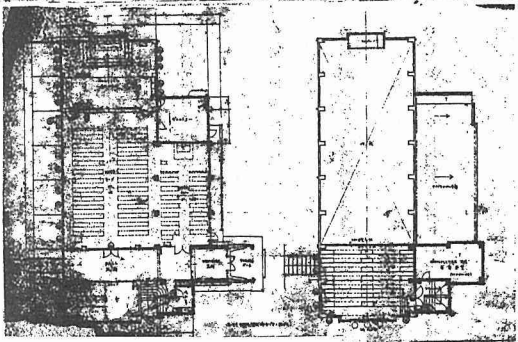
図版［1］計画案Ａ着色外観透視図
：1954（S 29）年３月
DESIGNED BY
M. MOTODA ARCHITECT

図版［2］計画案Ｂ着色外観透視図［Ⅱ期現会堂］：1954（S 29）年６月
MOTODA ARCHITECT STUDIO









図版［3］Ⅱ期現会堂　仙台聖公会聖堂（准大聖堂）新築工事設計図２・３
平立面図：元田建築設計事務所
1956（S 31）年 12 月・1957（S 32）年２月